

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Hideaki Mori

1983年名古屋市生まれ。実家は明治36年の創業で、全国で唯一、力士の髷を結う相撲櫛をつくっている老舗。大学卒業と同時に三代目である父に弟子入りし、以来、研鑽の日々を送っている。



つげ櫛(つげぐし)

「万葉集」や「源氏物語」にも記述がある、本つげの木を材料とする櫛。古くから櫛の最上級品として扱われ、一生物と評されるほど丈夫で使いやすいため、親から子へと代々受け継がれることも多いという。

つげ櫛職人

森英明氏

一つ一つの技に血を通わせ、櫛との真剣勝負に挑む。

髪をとくため、あるいは髪に挿して飾るために古くから親しまれてきた櫛。その素材は木や鼈甲、象牙などさまざまだが、中でも本つげの木は丈夫で弾力性があるため髪を傷めることがない。また、加工によっては静電気を起こさず、使うほどに艶のある美しい鉛色になっていく。

森英明さんは、100年以上続く老舗で修業をする若き職人。力士の髷や芸妓・舞妓の日本髪を結う床山から、絶大な信頼を得る父を師と仰ぐ。

きつかけは？

森「兄たちが継がず、自分がやらなければ家業が途絶えるところだったんです。三代続いた店なので、それは惜しいと思います、父に弟子入りました」

つげ櫛は、長い時の流れから生まれる。本つげの木は、最低限必要な直径10cmに

育つまでおよそ50年かかる。その丸太を製材して1年ほど乾燥させ、さらに5年間、板の反りを直すため燻しと陰干しを繰り返す。中には10年かかる板もあり、手間ひまを惜しまないことで、美しい櫛ができるという。

森さんは、京都の床山(力士の髷や役者の髷などを結い上げる者)からの注文で6寸(約18cm)の櫛づくりに挑戦していた。その櫛には樹齢100年を超えた板を使う。当然、失敗は許されない。

まず、燻されて真っ黒になった板をかんなどで削る。そうしてつげ本来の木肌を取り戻した後に、鋸で慎重に歯をつくと、櫛づくりは最も重要な工程を迎える。歯の角を削り、頭皮に当たる先をとぎ心地の良い太さに磨く歯ずりの作業だ。師匠はそれを、櫛との真剣勝負と言う。「髪を心地よくとけるかどうかは、職人が何千回と血を通わせて磨くことにかかっている」と。

紙ヤスリを用い、一本一本同じ早さで

磨く。テンボが少しでも狂えば、太さがバラバラになる。全神経を注いで磨きを繰り返した後、砥草で仕上げを行う。長い櫛づくりのゴールは、もう間近だ。

目標は？

森「燻しと陰干しの年数を短くしたり、作業の手間を省いたりすることなく、昔ながらの櫛づくりを守っていきます。時間はかかっても、やはり良い物をお客さまに届けたいですから」

師匠である父から、技を超えた物づくりの魂を受け継ぎ、櫛との真剣勝負に挑み続ける。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2011年3月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!

代々続く家業を継ぐために、全力を尽くす姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版 パソコンやタブレットでご覧になれます。

アットホーム明日への扉

検索



TV番組 ディスカバリーチャンネル(CS) 冠番組 「アットホーム presents 明日への扉」放映中 毎週金曜日 22:53~23:00



ビジョン ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 好評公開中

No.056 / 山中漆器 木地師 田中 瑛子 氏